

太田素子・浅井幸子 編  
『保育と家庭教育の誕生 1890-1930』



藤原書店／四六版上製336頁／2012年2月29日発行／  
ISBN978-4-89434-844-8／3,600円（税別）

福元真由美 東京学芸大学准教授

家庭の子育てが国をあげて今日ほど取り上げられる時代は、かつてなかっただろう。歯止めのかかない少子化の背景には、孤立化した子育てとその不安や負担に押しつぶされそうな母親たちの存在がある。いくつもの調査報告から、現代の子育てを困難にさせた要因として、核家族化にともなう性別役割分業と親の責任の増大、家庭と地域とのつながりの希薄化、地域の子育て機能の低下が浮き彫りにされてきた。

くわえて、近年の幼稚園と保育所も重大な局面に立っている。一つは、保育における遊びの意義の説明がこれまで以上に社会から要求されている状況である。例えば、1990年代の小一問題への関心は、自由な遊び重視の保育への批判を生じさせた。幼小連携や幼稚園・保育所の評価においても、遊びが子どもの発達に多面的に機能すること、小学校以降の学習につながることを説明する責任が求められる。

もう一つは、幼稚園と保育所の制度の再編が急速に議論されるようになった状況である。内閣府の「子ども・子育て新システム」構想では、就学前の子どもに教育と保育を一体的に提供する「総合こども園」の創設が検討され、幼保の一元体制の構築が目指された。これに対し、幼稚園は就学前の教育を担う役割が損なわれると反発し、保育所も設置の基準がゆるめられて保育の質が低下すると反対した。結局「総合こども園」化は見送られたものの、幼稚園と保育所それぞれの存立の基盤を揺るがす事態が生じたといっても過言ではない。

子育てと保育は、ともに大きな転換を迫られている。ここで、両者の問題の成り立ちを捉えることは、新たな方向に向けて一步を踏み出す重要な手がかりとなるだろう。こうした時期に、本書が出版されたのはまさに好機である。しかも本書は、子育てと保育をめぐる問題をそれぞれ別の事柄として扱うのではなく、分かちがたく結びつくものとして捉え議論している。かつ、歴史研究の手法により子育て

と保育をめぐる問題の前提を多様な観点から探究し描き出した好著である。各章ごとに読み応えのある研究成果が、近世教育史、近代教育史、幼児教育史、家庭教育史、児童文化史の気鋭の研究者諸氏によりまとめられている。

それでは、各章の内容に即して本書を紹介していこう。

序章『『家』の子育てから社会の子育てへ—幼稚園・保育園の登場と日本の近代社会—』（太田素子氏）では、本書の課題として、明治期の近代化にともない追求された「家庭」像・「家庭教育」の理念と保育制度成立の関連を明らかにし、両者の今日的な変動の傾向を成立史の側から取り上げることが述べられる。具体的な作業としては、幼稚園制度の成立期の学校や家庭との関係における幼稚園の役割・成果に関する当時の理解を明らかにすること、保育制度の成立過程を近代家族形成過程との関係で検討すること、幼稚園と保育所の二元体制の成立の様相を描き出すこと、保育者における保育の専門性に関する関心の登場とその理解の内実を示すことが挙げられている。そして、これらを制度史のレベルではなく、直接子どもと接する大人の実践のレベルおよび日々の営みの記録のレベルで考察するという。評者は、「養護と教育という二つの機能の未分化な関係を表現できる〈保育〉という概念が日本社会では命脈を保ってきたことの積極的な意義を検討してみる価値はある」（15頁）という指摘に、本著もまたその作業の中に位置づけられていくのではないかと思った。

第一章「幼稚園論争の回顧と展望」（太田氏）では、幼稚園制度成立期に起こった幼稚園の必要性和有用性に関する論争（「幼稚園論争」）に注目し、二つの問題を抽出している。一つ目は、幼稚園教育が小学校的な教育とは異なることを主張するため、幼児の「身体」の発育と「感情・意欲」の涵養が教育目標の主流となり、課業中心の保育から「自発的な遊び」が分化したことである。保育固有の目標や方法を位置づける努力が払われたものの、保育と学校教育の連関が見失われる側面もあったことが指摘されている。二つ目は、「家庭を補う幼稚園」の理念のゆらぐ中で、集団保育は肯定的にも否定的にも解釈され、家庭との関係における幼稚園の意味づけはあいまいなままになったことである。幼稚園関係者が幼稚園と家庭の関係を明確に論じることができなかったのは、彼らが近代の性別役割分業や儒教的な家族主義を十分に対象化しえなかったことと関係しているという。この考察は、彼らの認識の特徴に関する端的な指摘とともにとても印象的だった。

第二章「保育記録の成立と変容—『婦人と子ども』を中心に—」（浅井幸子氏）は、幼児教育雑誌『婦人と子ども』に掲載された保育記録を、「保育経験の語り口」の変容に着目して検討している。1900年代の家庭の子育ての欠陥を補完するという保育の語りは、「観察」による記録法を得て課業や遊びに関する内容へシフトしていく。1910年代には保育者が一人称の「私」として語るようになり、1920年代の東京女子高等師範学校附属幼稚園では保育者が「出来事を意味づけ

自らの保育を構成する主体」として語るようになる。しかし、1930年代の誘導保育の記録では、教材や手順を詳しく記述する定型化された語りが多くなっていく。こうした実践の多様な語り口の成立とともに、子育てから自立した保育が課業や遊びとして確立され、問題の子どもへの対応を維持しつつ、カリキュラムの研究によりその専門性が追究された過程が明らかにされている。家庭を啓蒙する保育者、実践を省察する保育者、技術を伝達する保育者とさまざまな保育者像が示され、保育者の専門職としての誕生を垣間見ることができて評者には得るものが大きかった。

第三章「家庭教育論成立への模索—堺利彦に着目して—」（藤枝充子氏）は、堺の日記、書簡、自叙伝、家族の回想、著書『家庭の教育』を用いて彼の父親としての実像と家庭教育論の特色を読み解いている。堺の子ども観は、長男・長女の養育を通して親子の強い情緒的絆に支えられた『「二なき者」としての我が子』から、社会によって成長を支えられる「社会的存在としての子ども」へ変化した。彼の家庭教育論は、「国家の縮図」として家庭をみるのではなく、「理想の家庭」の広がりとして「理想の社会」を構想し、家庭の改良のための教育を説く。けれども堺は「子どもの教育」が「家庭の目的の半分」と言うのに、これに関する記述は部分的だと指摘されている。堺が長女の養育において経験した社会が担う子育ても、言明されていないが親戚や知人という私的な関係の域を出ていない。これらと関係があるだろうか、堺の家庭教育論では、家庭と社会との開かれた関係を構想する方向が示されながらも、子どもの養育・教育の社会化に関する議論は宙に浮いた感がある。それゆえに、子育ての社会化に真正面から取り組む保育実践の誕生以前の家庭教育の模索が示されているようで、堺の事例はとても興味深い。

第四章「玩具の誘惑、玩具の呪縛—1920年代から30年代の『児童文化』をめぐる—」（首藤美香子氏）は、玩具の歴史的位相を明らかにし、子どもにとっての「モノ」としての意味づけの変容と子育てや教育における価値の多層性を考察している。「手遊び」「お守り」から「教育玩具」ともなった玩具は、子どもの「所有と消費の欲求」をかりたて、大人が愛情を託して買い与える「モノ」となる。「玩具展覧会」（1925年）と倉橋惣三『玩具教育』（1935年）の検討からは、発達に即した系統性という心理学的価値と遊びを誘導する教育的価値が玩具に付与されたことが明らかにされる。玩具は、家庭には親による子育ての充実を図る指標をもたらし、幼稚園では遊びのための教育の組織に向けた努力を増大させていく。こうして家庭教育と幼稚園教育は、玩具を接点としてお互いの関係を再考するよりも、むしろそれぞれの独自の展開を加速させたように思われる。なお、玩具を通して「児童文化」の歴史を問い直そうとした本章は、「文化」をめぐる『『教育的』か否かの界面で、『大人のまなざし』と『子どものまなざし』がせめぎ合う、その脆くも不安定な関係性』にその核心となる特徴を捉えている。

第五章「社会的保育の登場と『自治共同（協働）』の探求」（太田氏）は、1930年代の都市における子育ての共同体の形成と「発達に応じた系統性」という保育内容編成原理をそれぞれ検討している。平田のぶの「子供の村」で目指されたのは、近代家族の「閉鎖的利己的な母性愛を否定」した「共同体に無私公平に奉仕する『社会的母性』」にもとづく母と子の集団的な関係だった。子供の村保育園の実践における「協働自治」は、子ども同士のことばによる対話よりも、「直感的で共感的な」関係に重点がある点で課題が残されたとみなされている。本章の問う「近代家族の愛着関係を前提としながら、子育ての共同化を目指す途」は、平田の挫折を引き継ぐ私たちの課題であろう。一方、城戸幡太郎の「発達に応じた系統性」の考えは、発達における教育優位の立場と個の主体性を重視する立場を「統一」する地平を拓いたという。これは、当時幼児教育と小学校教育の接続の鍵となる考えが登場したことを示唆している。けれども保育問題研究会の保育内容研究では、他の研究者との考え方のずれもあり、城戸の「子どもが主体的に既存の文化を獲得してゆくプロセス」が共通の認識や統一的な保育案に具体化されることは十分になしえなかった。

以上、各章ごとに内容をかみしめながら読み進めていくことのできる著書だった。ここでは紙面の都合で紹介できなかったが、古代から近代にいたる子ども、遊び、子育て、保育に関する10編のコラムもとても興味深かった。本書を読み終えて、あらためて評者は自ら生きる時代の子育てと保育の関係について考えをめぐらせることができた。

なお、本書は、2009 - 2010年度の和光大学総合文化研究所のプロジェクト「近代日本における保育実践史の研究」の成果である。「総合的知性」および「総合的教養」を重視する和光大学から、このように研究書として優れているのはもちろんのこと、教養的な読み物としても質の高い本書が生み出されたのは素晴らしいことだと思う。子どもたちの育つこと、遊ぶこと、学ぶこと、そしてこれらを支えることに関心のある学生、研究者、教育関係者のみなさんに、ぜひ手に取っていただきたい一冊である。

[ふくもと まゆみ]